阿部知二全集

第4巻

阿部知二全集

第4巻

河出書房新社

阿部知二全集　第4巻

一九七四年十二月十五日　初版印刷
一九七四年十二月二十日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話（〇三）二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

旅人 …… 5
街 …… 141
解題 …… 福田久賀男 …… 365
解説 …… 荒正人 …… 369

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

阿部知二全集　第4巻

旅

人

前書き

いつの頃から私はこんな風に落着のない心になつたといふのであらうか、年のうちの半ばとはいはぬまでも、三分の一ほどは旅に出て暮す習癖が身についてしまつた。去年は、吹雪の北陸の海岸を歩いたのをはじめに、早春の出雲、初夏の北海道、真夏の信濃の山、秋の伊勢の国といふやうに出て行き、今年も雪の越後、早春の伊豆、晩春から一月ほどの北満洲と北京、夏のはじめの奈良、真夏の志賀高原、などと、そのほかの小さな旅をかぞへれば、月に一度は家を出てさまよつてゐる。——このあひだは長崎の街に行つた。冬のはじめだといふのに、夾竹桃やカンナやさぼてんや糸蘭や蘇枋の花々が咲き、日にきらめく海沿ひの石畳の坂路を歩くと汗ばんでくるほどであつた。しかし、半月ほどして帰つて来てみると、東京の街はさむざむとした冬ざれの景色であつた。

まだ旅の疲れが取り切れてゐなかつたが、S大学といふところに座談会によばれて行つた。檜坂といふ歴史の方の助教授の司会で、話がつづいてゐるうちに、短い冬の日は暮れてしまつて、その教室を檜坂氏と肩をならべて出たときには、薄闇にほのかに光りながら、今年の初雪が散つて来てゐた。檜坂氏は、私とほぼ同じ年頃とおもへたのだが、子供のやうに眼をぱちくりさせる癖があつて、まつたく人懐こい感じを与へながら、その辺でお茶でも飲みませうといつて、学校の前の坂路を二人で歩いたとき、私にしきりにはなしかけた。

「あなたは始終旅をされるさうですね。紀行文などで伺つてゐるのですが、何でも今年は北満の方を歩かれたさうですね。——それから、奥州の峠で雪嵐に逢はれたといふのは、いつのことでしたつけ。」

「ぶらぶら旅ばかりしてゐて、すこしも勉強が出来ません。」

「いいえ、そんなつもりで云つたことぢやないのです。ただちよつとお尋ねしたかつたのですが、北満の五大蓮池の山といふのは、どんなところなのでせうか。」

「それはもう、眼のとどくかぎり涯しもない野のうねりのなかにあるのです。私が行つたのは五月のはじめでしたが、まるで褐色の大海とでもいひたいほどでした。そこに空に向つて、野火の煙が際限もなく立ちのぼつてゐます。草の中を、ノロといふ羚羊のやうなものが、ちやうど船と競争する飛魚のむれのやうに、浜黒線の汽車の進路を掠めて走ります。その、五大蓮池の休火山といふのは、その大平原のなかに、まるで島のやうにぽつんと突つ立つてゐる五つ

の嶮しい山です。不自然な感じをあたへて、それがあの山に対する者に、神秘的な伝説でも連想させないで置きません。」

「満洲事変のころ、――昭和六年の秋か冬だつたでせうか、あの辺でも激しい戦闘があつたはずでしたね。」

「ええ、後で北京で、その戦闘に従つたといふ或る中佐と逢つたとき、その話をききましたが、勿論そのときは鉄道もなく、零下何十度といふ荒野のなかを彷徨する敵を追つて、じつに苦しい行進がつづけられたのださうです。今、汽車で行くと、ところどころの丘辺や川のほとりに、その時の戦の跡を示した記念柱が立つてゐますが、それを眺めてゐても、それは何といふ悪戦苦闘だつたのだらう、と感じ入らないではゐられません。」

「それに、あの辺ははじめはひどく治安も悪かつたんですつてね。」

「ええ、今ぢやさうでないが、何しろ馬占山の本拠に近いところでしたからね。」

「多少、僕に縁故のある男が、その五大蓮池の山の辺でその戦争の直後、匪襲で斃れたのです。だからお聞きしてみたかつたのです。」と、檜坂氏はいつたが、急に立ちどまつて、「この辺でお茶でも飲みませんか。」と、十字路の角の小さな古びた喫茶店に私を誘つた。

黄色い壁、黒い椅子、古びた電気蓄音器、傍の菓子棚、紫のきものをきた少女たち――どこの街角にでもあるやうな、平凡な店である。窓には雪がちらついてゐる。隅つこでは、とぼしい石炭のストォヴをかき立てながら、学生の仲間が、がやがやと大声で、事変のことを論じたり映画や本のことを批評したり、就職のことを語つたりしてゐる。これもどこにでもある風景だ、とおもひながら、私は檜坂氏の前に坐つて珈琲をすすつた。そして、

「何年たつても、いつも変らない景色ですね。」と、しきりに眼をぱちぱちさせながら、壁をながめ、少女を、学生を、古びた蓄音器を眺めてゐる檜坂氏に向つて云つた。

「ええ。今から何年か前に、ここにこんな風にして坐つてゐた男のことを、僕はまた思ひ出したのですが……それが、あなたが嵐の中で悩まれたといふ、奥州の峠で、行方不明になつたのですよ。それもやはり僕に多少の縁故のある男でしたが。」

「さつきは、北満で死んだと云はれたぢやありませんか。」と私は、この檜坂氏はいつたい何を取りとめないことを云ひ出すのだらうか、こちらをからかつてゐるのだらうか、と思ひながら問ひかへした。

「いや、いや。」檜坂氏はますます眼をぱちぱちさせるのだつたが、私には、その表情の中には一種の悪戯気がまじ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

つてゐるやうにもおもはれ、また何か深い悲しみがひそんでゐるやうにもおもはれてきた。
「あなたは、Sといふ一寸した小説書きの名前はおぼえてをられないでせうか。多分もう忘れてをられるとはおもひますが。」と檜坂氏はつづけた。
「ああ、さういへば、」と私は答へた。「それがその峠の人物ぢやありませんか。たしか、ユーモラスな小説を書いてゐた人ぢやありませんか。」
「さうです。あなたはおぼえてゐて下さつたのですね。僕の友人だつたのです。何年も前に、あまりぱつとしない小説を二つ三つ書いて消えてしまつた男のことですから、今まであなたのやうに記憶して下さつてゐる人に逢つたことがありません。これはたしか何かの因縁です。もつともつと、僕はあなたと話したくなりました。」
しかし、その時、隅の方の学生たちが小説の話などはじめた様子だつたので、私はそれを潮にして立ち上つた。檜坂氏は立つて追つて来て、十字路の電車をやりすごしながら、なほも私の肩をつついて、もつと話したいといふのだつた。
私は、婉曲にことわらうと思つて、その言訳の言葉を考へながらもぢもぢしてゐたのだつたが、その時急に檜坂氏は横を振り向いて、一人の初老の紳士に、しやちよこ張つて敬礼をした。その人は、黒い帽子、黒い外套、黒い鞄に包まれて、肩を張りながら、雪の中を傘なしに、しかも、そのことにも気付かぬやうに、また檜坂氏が鄭重に敬礼したのに対しても、ちらと眼の玉をうごかしただけで、ぐんぐんと電車道を横切つて行つた。一目見ただけで人の心を凍らせてしまふやうな、何ともいひやうのない暗いものがその風貌の四辺にただよつてゐる。あのやうな男は一生のうち一度だつて笑ふ瞬間はないのだらう——と、私は反感に似た感情をおぼえながら、その無愛想な、傲慢な、冷たい、苦い顔付をした紳士の後姿を見おくつた。
「あれが僕の方のK教授です。」と、檜坂氏は、同じ科にゐながらもいつも畏怖を感じてゐるのだといふことを隠さうともしないやうな声音でささやいた。
K博士といへば、私ですらその名くらゐは知つてゐた。東西交渉史といふやうなことから出発して、今では支那についての一権威であつた。苦学力行した人だともいはれ、学者としては政治的な手腕すらあつて、敵の多い学界を押し切つてゐるのだとも云はれてゐたが、なるほどあの風貌や態度はその噂にそむかぬ、と私はおもつた。
「ああ、あの人の顔まで見たんぢや、どうしても、あなたに色々話さないではゐられぬといふ気持になりました。お願ひです。これから僕の家に来て下さい。近いのです。す

き焼でもつついて暖まりながら、僕の話といふのをきいて下さいませんか。」と檜坂氏は、わけの分らぬ理由で私を取り巻きながら、私の外套をつかまへて放さうとしなかつた。

たうとう、それからほど遠くない檜坂氏の家に連れられて行つてしまつた。省線の駅に近い高台にあるその家は、大学の助教授といふ身分にしては巨きなものだつたから、この檜坂といふ人は、豊かな家の人であらう。玄関でしばらく外套や帽子にいちめんにまみれついた雪をはらつてから上ると、襖の蔭の薄闇で、奥さんがお辞儀したが、感冒でふせつてゐるといふので、そのまま退いてしまつた。ちらと見ただけであつたが、美しい人だとは印象に残つた。ことに、部屋着のうへに黒つぽい羽織を引かけ、乱れた髪をそそくさとつかねて、白粉の気もない顔であつたが、かへつてその美しさを強くあらはしてゐた。

その後は、慣れた女中が、和漢洋の歴史の書物や雑誌や記録文書の写しなどが散らばつた部屋を片づけて、そこですき焼の用意をした。奥さんはそれ切り出ては来なかつた。檜坂氏も私も酒はつよかつた。たうとう、私は省線の終電車まで、彼の話をきいてしまつた。檜坂氏は、次のやうに前置きして、例の悪戯気をふくんだ眼をぱちぱちさせながら、話したのであつた。

「この話は、あなた方の書き方でいへば、第一章はA青年のことども、第二章はB教授のことども、第三章はCといふ女のことども、第四章は、ふたたびA青年のことども、——といふ風にでもなりませうか。僕は人物をすべて仮の符号にして置きます。ただし、これはまだ支那事変も始まらぬ前の、人々が甘い取りとめもない夢を見ながら生きてゐたころの話——つまり、教訓などはなに一つない話だと思つて下さい。」

さうして物語つた檜坂氏の話といふのは、終りの方にちかづくにつれて、酒の酔の幻想も交つて来たのではないかとおもはれる。しかしともかく私は、彼のいふ通りに、四つの章にしてこれを書かう。ただし、AとかBとかCとかといふ符牒は、すべて当り前の名をつくつて付けることにしよう。ただ、この中にあらはれるUといふ青年だけは、そのままUといふことにして置く。といふのは、これが私には檜坂氏自身のやうにおもはれてならないからである。もし苗字を付けるとすれば「檜坂」とするほかはなく、しかし、それは差控へなければならぬとおもはれるからである。

私が檜坂家を辞して出たときには、真夜中の闇に、雪がしきりもなく舞ひ散つてゐた。

第一章　仁礼青年のこと

その一

今から何年か前の、三月はじめの寒い日。

仁礼修造は、S大学の図書館に勤めてゐた。外には雪がちらつく夕方、かじかむ手をさすりながら、外国書のカタログをつくつてゐた。

……Holyoake, George, Jacob. The co-operative movement today. 2. ed. London Methuen 1869……Houben, Heinrich Hubert. Der gefesselte Biedermeier. Literatur, Kultur, Zensur in der guten, alten Zeit. Leipzig, Haessel, 1924……Hunter, Henry C. How England got its merchant marine, 1066-1776, New York, National Council of American Shipbuilders, 1935……

毎日、かういふ風にして、この図書館の書物の目録をつくるのが彼の仕事だつた。それがもはや学校を出てから四年もつづいてゐる。退屈してゐなかつたか？――そのやうなことを訊ねるだけでも残酷なことであらう。この男に取つては、安い給料で、この書庫のかげの室にこの仕事をするために使つて貰ふほかに、生きる途がなかつたからだ。彼にしても、四年の前には、もつと大きな、美しい望をもつてこの大学を卒業した。それは、文学によつて生きようといふことだつた。

しかし、今の仁礼修造に、「君の芸術はどうなつたのか？」と訊ねることはやめよう。顔を赤らめ、悲しさうな苦しさうな顔をして、うつむいてしまふのにちがひない。この数年のあひだ、書いては卻けられ、書いては卻けられしてきたことばかりが事実なのだ。今でもその望を捨てないで、勤のかたはら書いてゐるかどうかも――一人か二人の極く親しい友達のほかは、誰も知るまい。ただ分ることは、この仁礼修造が、「芸術家」などといふ言葉で連想する風貌とは、かけはなれた男だといふことだ。どちらかといへば小柄で、肩が怒つてゐて、さほど醜いとはいへないが、やや田舎じみた浅黒いむつつりした顔をしてゐて、髪もきちんと刈つてゐるし、どこを見ても、芸術青年といふ様子はなかつた。しかし、案外にこのやうな男の胸の中にこそ、芸術の夢などといふものが、執拗に根を張りつづけて行くものなのかも知れないのだから、この男がただ図書館員としてだけ生活してゐるのだと決めてしまふことも軽はずみであらう。

……Jacquemet, G, abbé, ed. Dictionaire de sociologie, familiale……もはや退けどきに間もなかつた。まはりの卓

では、仕事をやめて煙草をつけたり、立ち上つて背伸びしてゐる同僚もあつた。向うの隅のタイピストもその音をとどめた。修造も、今日はもう一息でやめようとおもつた。

一人の同僚が、窓ぎはに歩いて行つて、庭越しに閲覧室の方を、手を振りかざすやうなおどけた恰好をしながらのぞいた。

「ああ、今日も、あのマダムXが来てるぜ。」

その声をきくと、修造は電気にかかつたやうに、書きつづけてゐた手をやめた。しかし、その挙動をみなに気づかれないやうに、煙草を取り出した。

「君はマダムXだなんて名をつけたが、マダムだなんて分らんぢやないか。お嬢さんかも知れんよ。いや、俺はたしかにお嬢さんだとおもふな。」と、もう一人の同僚も窓ぎはに歩く。

「ほほ、どつちにしても、あなた方には関係なくてよ。」

古くから勤めてゐる、眼鏡をかけたタイピストが笑つた。

「どつちにしても、美しければいいぢやないか。見る分にはかまはないだらう。ねえ、仁礼君。」と、窓ぎはから帰りながら一人が修造に声をかけた。

修造はだまつて、カードをそろへながら、顔面の動揺をかくすやうに反対の方を向いた。

「禁欲派(ストイク)だなあ。」

「美しきものは懼れに似たる感情をおこす、か？　誰かそんなことを云はなかつたかなあ。」

「また出鱈目だ。」

などと二人は云ひながら、わざと修造にきこえよがしに喋言つてゐるやうであつた。

「だが、あんなきれいな人が、どうして、こんな殺風景な図書館にわざわざ潜りこんで、雪の日も雨の日も、三日にあげず通つて来るのだらう。勿体ないやうな気がするぢやないか。俺はそれが不思議でならないんだ。」

「それが、俺も不思議だつたんだが、――俺はいつたいどんな本をあの人が読んでゐるか、貸出掛にそつとたづねてみたよ。」

「おやおや熱心なことね。」

さうした、二人の同僚とタイピストとの対話に、修造の耳は引かれてしまつてゐた。煙草の灰が服に落ちかかるのも忘れて、ただ無意味にカードをいぢくりながら、きき耳を立ててゐた。

「その結果によればだね。」と、同僚の一人は得意になつてしやべつた。「あの人は、妙なものを、この三ヶ月ほど読んだり写したりしてゐるんだ。はじめは『長崎市誌』あたりだつたが、だんだんと深入りして『文明源流叢書』とか、三浦梅園『帰山録』とか『和蘭翻訳書目録』とか、

――今日は、アジア協会出版の洋書なんか借出さうとしてゐたぜ。」
「君、それぢや。」と、一人がおどろいた声を出した。「例の新しくきた史学の助教授――何といつたけ、さうだ、風早氏と同じやうな研究になつちまふぢやないか。」
「そこなのだ。今日のアジア協会の冊子なんか、その風早氏とぶつかつたんださうだ。」
「女のくせに、妙な研究なんかするなあ。あんなにきれいなら、男たちとでも遊んでゐた方がよささうなものだのに。」
「ただし君とは遊ばんだらうね。だから君はその勉強振りの方でも見ならへばいいんだ。だが、研究は研究として、僕は彼女のために心配するんだよ。何しろ風早氏を相手に、同じ題目にぶつかつたんぢや意味なく敗けるだけだよ。これはいつそ、風早氏に従いて教を乞ふべきだね。」
「そのことを、あの人は知らんのだらうか。」
「教へてやりたいね。」
「相変らず、女の人には御親切なことね、ほほ。」
仁礼修造は、みなの冗舌をそこまで聞くと、三人の顔も見ないで外に出た。
外套の襟を立てて、苦しさうな顔をして、学校の前の坂路を、雪にまみれながら急いだ。

――みなが話してゐたその美しい女が、図書館に顔を見せ出して、もはや三ヶ月近くになるであらうか。修造が気がついてからでも、指を折つて数へてみると、確かに二ヶ月になる。そのあひだ、週に三度か四度は、質素な、しかし上品な服をきたその女は、かならずあらはれて来て、長い時間勉強しては帰つて行く。修造は、二人の同僚におとらぬほど、そのことに好奇心を寄せてゐた。いや、ほんたうのことをいへば、彼こそがもつとも恥づべき男だつたかも知れない。といふのは、もはや一月ほど前から、彼は、その女が図書館のかへりには必ず学校から三町ほど離れた交叉点の角の小さな喫茶店で珈琲を飲んで行くことを、ひそかに知つてゐたのだ。いや、そればかりではなく、いつのころからか、自分も、自分の仕事が終ると、その喫茶店まで歩いて行つて、そこで憩ふことにしてゐたのだ。もちろん近寄つて声をかける勇気なども有り得なかつたのだが、なるべく遠くの卓から、その人がしづかに珈琲をすすつて立ち去るのを盗み見したことが、もはや幾度つづいたかも分らない。この修造の秘密を、同僚たちが知つたならば、何といつて嘲り笑ふことであらう。いや、それよりも、あの人もまた、もはや自分のことに気がついて、気味の悪い男だと思つてゐるのではないか。
寒い夕暮の風の中だつたけれども、修造の顔が羞恥のた

めに火照つて来た。しかしその癖に、その足はひとりでに、今日もまたその交叉点の方に向つていそいでゐた。

——あの人は、同僚たちもいぶかしんでゐたやうに、何のためにそんな妙な研究などするのだらうか。それよりも、あの人は、風早助教授のことを知つてゐないのだらうか。地方の専門学校から、その特別の学殖と才能とを認められて、このS大学に風早氏がうつつて来たのは、一年前であつた。彼が、大きな野心と逞しい精力とを以て、日本の対外交渉史、ことにその思想的方面の研究を行つてゐるのは、同僚たちも云つたやうに、たしかに事実だ。その研究には、二三の方面からの補助金も出てゐるはずであるし、もしあの女が、ほんたうに同じ方面のことを、何の興味からでもあれ、研究するといふならば、おのれの研究は、もはや風早氏のそれの前には意味をなさぬのだと諦めてしまふか、それとも、弱々しい力で続けるよりは、風早氏の助けを借りるか、教を乞ふかする方が賢明であらう。——そのやうなことを、あの女は知らないのだとすれば、何といふ無駄をしてゐるのであらう。

「このことを知らせたいのだが。」

とつぶやいたときには、もはや修造は機械的にその喫茶店の硝子の扉をひいてゐた。——

「どうしてそれを告げたらばいいのか？」とも彼は頭をひねつてみた。すると、自信が挫けて来た。そして、そんなことをおのれへの口実にして、今日もまたここに来てしまつたのだ、と気がついた。

修造は、いつもの定りのやうに、一番隅の菓子棚の蔭の小さな卓に腰をおろす。女はまだ来てゐなかつた。

紫のきものを着た少女たちの一人が、珈琲を持つてくる。いつもこの少女がかならず修造のところへ来るのである。この頬の赤い、まだ田舎じみた少女は——いつのまにか、とみ子といふその名も知るやうになつてゐたが、——修造がいつもの定つた時間に来て、一人の女を遠くから眺めることを、もはや気づいてゐるのにちがひない。黙つてゐても、珈琲をはこんで来た。その人が扉にあらはれると、「よかつたわね。」といふやうに、ちらつとこちらに眼配せしたり、待つてゐてもあらはれぬことがあつたりすると、気の毒さうにこちらの方を見たりすることもある。それは親切な心からのことであつたかも知れないが、修造に取つては、わづらはしく重苦しくてたまらなかつた。それで、この少女にはいつも慍つたやうな顔しか示してゐない。

今日も、わざと少女の方から顔をそらして、硝子戸の外の、雪のふる街筋へ眼をやつてゐた。女は、まだあらはれなかつた。

一方の隅のストォヴのまはりには、外套のままで、学生

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.